

---

# いとしの美少女男子。

北原小織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いとしの美少女男子。

### 【Nコード】

N3397D

### 【作者名】

北原小織

### 【あらすじ】

美人モデル『神崎ゆりあ』の大ファンの奈那は、街で本物の神崎ゆりあに遭遇！しかし、なんと神崎ゆりあは×××だったという秘密を知ってしまったて・・・！？超美少女系男子とごく普通の（？）女子高生の愉快な日常！

## 第1話 いとしの美人モデル。 (前書き)

ガールズラブではありません。  
安心してお読みください

## 第1話 いとしの美人モデル。

初めて見たのは雑誌の化粧品広告だった。

雪のように透き通った白い肌、蒼く深い瞳、細くしなやかな体、ウエーブのかかった金髪。

女神、という言葉がよく似合う、すべてを包み込むくらいキレイだった。

それからあたしは、モデル『神崎ゆりあ<sup>かんざき</sup>』が生きがいになってしまった。

「ええ〜っ、奈那、それレズって奴じゃない〜？」

あれから1年弱。あたし、門倉奈那<sup>かどくわなな</sup>は16歳。

「違う、ファンだよ。ってゆーか、レズでもいいよ、大好きだもん」

ポスター、広告、写真集。マイルームは神崎ゆりあで埋め尽くされている。

筆箱・カバン・机・ノート、いろんな物に切り抜きをON。

「確かに神崎ゆりあって、オーラがハンパないよね、オーラが」

「ちよつと！ゆりあ様の一番のファンはあたしだからねッ!？」

「はいはい、分かってますよ（てゆーかあたしはファンではないのに）」

「あ〜ッ、ゆりあ様に逢いたい〜」

繁華街を通って帰るのがあたしの日課。

目的？そんなゆりあ様の広告を見るために決まってるじゃないッ！あこがれとか愛情っていうよりも、磁石に引き寄せられる砂鉄みたいにただただ惹かれてる。

恋の感じとも違うし、衝動買いの感じとも違う。けどその2つが結

構近い。

毎晩夢に神崎ゆりあが出てくる。

毎晩毎晩、ただあの大きな眼であたしを見つめて消えていくんだ。

素肌に潤い……………

あ、始まった。

ビルの大きな液晶画面に映し出される資 堂のCM。

綺麗な顔が画面いっぱいに映る。

「ゆりあ様……………」

何度見ても引き込まれそう。あんまり綺麗すぎて、切なくさえなる。生で見たらどうなんだろ、テレビってちょっと太く見えるとか聞いたことあるから、もっと綺麗なんだろうな。画面に映る姿でも涙が出るほど綺麗なのに、これ以上綺麗なものがこの世にあるんだろうか。

「生で見たいな……………」

目の前にいたりしないかな。プライベートで買い物に来てたりして。

……………なんてね。

ゆりあ様いないかなあ〜。

ゆりあ様〜ゆりあ様〜

ゆり……………あ……………様

ゆ……………りあ……………様？

ゆっ、

ゆりあ様！？

50メートルくらい先に、あの特徴的な瞳が見えた。

## 第2話 神崎ゆりあの秘密。

頭より先に体が動いた。

あたしは全速力で（人ごみだが）神崎ゆりあと思われる生命体に向かって走っていた。

「神崎ゆりあさんッ！大ファンですー！！」

蒼く深い瞳、白く整った顔、深めにかぶった帽子の下に見える短い黒髪、パーカにジーンズのボーイッシュな格好・・・

あれ？

短い？黒髪？ボーイッシュ？

「おわっ！？」

意外とトーンの低い声・・・！！？

「あの、あたしっ、神崎ゆりあさん凄い大好きで！よかつたら、あの、sasasサインとかっ」

自分で何言ってるか分かんない。

生・神崎ゆりあを目の前に倒れそうなくらい興奮していた。

「あ、ちょ・・・っとな静かなとこ行きましょ？」

神崎ゆりあはあきらかに引いてますよねな口調で言いながら周りをちらりと見た。

あたしの絶叫効果でいつのまにか周りには人だかりが出来ていた。

「なんでもありません。あたしたちはただの友達です」

神崎ゆりあは完璧な笑顔でそう言い、そしてあたしの手をとって猛スピードで走りだした。

「えっ！？なにっ」

「いいから走れ！」

野次馬は「絶対ただの友達じゃないよねキミら」とかわいそうな人を見る目で走り行く不思議な美少女と普通の女子高生合計2人を見送っていた。

わあ、速いよ、速いよゆりあ様。

綺麗な上に俊足だなんて素敵すぎるよゆりあ様！

そんな素敵なゆりあ様に似合わない路地裏であたしたちは止まった。

「今のこと記憶から抹消できる？」

「できません」

「即答？でもまあそりゃそうだね、じゃあ話してあげるけど、キミ名前は？」

「門倉奈那です！16歳の高1、あとみずがめ座のO型ですが・・・」

・

「+ でいろんなことありがとう。長くなるけど、時間ある？」

あたしはケータイのバイブくらい小刻みに頷いた。

ゆりあ様は綺麗な顔で軽くため息をつき、またもや完璧な笑顔をつくった。

「神崎ゆりあ、実は男なんだよね」

### 第3話 3年前の複雑な事情

3年前。

「お母さん！お母さんお母さんお母さん！！」

「何よ！頭悪いオウムみたいに」

「オーディション！オーディション受かった！！」

「何の？」

「やったあ受かった！受かったんだよお母さん！」

「なんのだつつつてんだろがいボケ娘」

「モデルだよ！」

神崎ゆりあは、某化粧品イメージモデルに100人の中から見事  
抜擢された。

「あたしモデルになったんだよ、これでワンランク高い醤油が買えるよ」

「そうねえ、お父さんとゆりあと2回給料日があるから、給料日直前の『日本人は米を食べる』のよ、肉なんでもともと食べなかったの、だから今夜は米オンリーよ」の夕食がなくなるわ ねえ」

「ただいまあ」

「あつ、慎帰ってきた」

神崎慎<sup>かんざきしん</sup>13歳が帰宅。ゆりあの弟。

「慎っ、あたしね、モデルのオーディションに受かったんだよ！」

「え、マジ？」



「元氣と書いてマジだよ！」

「本氣じゃね？」

「んなこたあどーでもいいの！明日初仕事なんだ」

翌日

「ゆりあ、38度5分よ」

「アホだな姉ちゃん、昨日喜んで遅くまで野外ファッションショーなんてしてたから・・・」

「今日仕事なのにい・・・・・・」

「そーねえ、ニート脱出の晴れ舞台だったのに」

「ニートじゃなくて学生だろう・・・」

「今日は安静にしてなさいね」

「だ、だめだよ、休んじゃダメって言われてたのに」

「だってあんたそれで行けるの？」

「いけない」

「も、じゃ、慎行きなさい」

「そーだね、オレが行くわ。・・・って、は!？」

「慎がゆりあのフリしてけばいいでしょ？あんた可愛いんだから」

基本的に母親は変人だった。

しかし彼女の命令は絶対なので、慎はカツラをかぶり女装し、撮影会場へ向かった・・・。

「あれ!?オーディションの時より綺麗じゃない!？」

「(マジかよっ) ああ・・・そうですか?ありがとうございます・・・」

・・・・とそんなこんなでスタッフは『神崎ゆりあ』ならぬ『神崎慎』をとつても気に入ってしまった。

本当の神崎ゆりあは、後日の撮影にウキウキと向かったところ偽者だと言われ追いつ返されてしまった、という悲しい結末を迎えたお姉さんなのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3397d/>

---

いとしの美少女男子。

2010年10月9日18時59分発行